

## 『教職研究』第5号 刊行の辞

平成国際大学

教職支援センター長 坂本 保富

教職支援センターの紀要である本誌も第5号の発刊となりました。今回もまた、“研究する教育者”を躬行実践されている先生方の論文5編を収録することができました。いずれも専門性を活かした教育に関わる内容の力作でございます。

思えば本誌の発刊は、本学における教員養成の大きな転機となりました。7年前に私が本学に着任したときは、教職課程を履修し教員免許の取得をめざす学生は学年で10数名、最終的に教員免許を取得する学生は7, 8名。悲しいかな、実際に教員採用試験に合格して教育界に羽ばたく卒業生は皆無でした。その理由は、本学が法学部だけの単科大学で、取得できる教員免許は中学校社会と高等学校公民だけであり、例え教員免許を取得しても、高倍率で難関の中学・高等学校の教員採用試験に合格することはとても無理、という厳しい現実を学生たちは知っていたからです。

そのような惨憺たる状況に驚いた私は、本学の教職課程の起死回生を図るべく、法学部だけの単科大学であるが故に、取得できる教員免許が中学校社会と高等学校公民のみであったのを、日本で唯一、通信教育で保健体育の教員免許が取得できる星槎大学（本部は神奈川県箱根町、事務局は横浜）との間で科目等履修生の協定を結んだのです。これにより本学の学生が、幼稚園、小学校、中学校・高等学校の保健体育、それに特別支援教育の教員免許までも取得できるようになりました。その結果、法学部でありながら、幼稚園や小学校、中学校や高等学校の保健体育、そして特別支援学校などの教員採用試験に合格が出はじめ、教育界に学生を輩出できるようになったのです。本人にとっても大学にとっても、奇跡のような嬉しい出来事でした。

この星槎大学との協定が発効する平成26年4月には、教職支援センターを開設し、特任教授を採用して教職志望の学生の指導に専念できる体制を整えました。今では3名の特任教授が配置されておりますが、その第1号が平澤香先生（埼玉大学教育学部及び附属中学校で教員養成、埼玉県教育委員会と加須市教育委員会で教育指導・教育行政を担当、現在日本学術会議学校地理教育小委員）でした。この平澤先生と、本学における教職課程の発足以来、教務課の教職担当職員として教職志望の学生の面倒を親身にみてこられた長濱亜芸絵氏、この3人でスクラムを組み、本学の教職教育の充実とその具体的成果の実現に奔走してきました。

その流れに拍車をかけたのが、平成27年度より始めた「教員免許状更新講習」でした。この地域教育への貢献事業は、文部科学省の認定を受け、地元の加須市や久喜市を中心として埼玉県の内外から予想をはるかに超える多数の受講者を得ることとなりました。この講習を担当される先生は、教職担当だけでなく法学部の多くの先生方も担当され、ご自分の研究成果を学校教員の教育実践という目線で、資料を作成し授業を展開して下さいました。しかも先生方は、受講者から高い評価を受けた講習の授業内容を放置せず、それに専門的な学

間的知見を加えて論文にまとめられ、本誌に投稿されるようになったのです。ですから、教職支援センターの紀要である本誌は、単なるハウツー物の実践報告書ではなく、長年に亘る高度の研究活動の成果を基にした具体的かつ実践的な内容の論文集となっております。換言すれば、研究と教育が融合した教育論文集、ということでございます。それは、講習を受講される学校現場の先生方に対して、日々の教育実践を支えくれる理論と知識を提供できる論文集である、と信じております。

さらに平成 29 年 4 月には、新学部「スポーツ健康学部」が設置され、本学は、法学部と共に二学部体制となりました。教員も大幅に増員され、施設設備も改善されました。今後は、益々、教育に資する実践的な論文を、本誌に投稿される先生が増えていくものと思われま

す。私が、国立大学を定年退職して奉職した当時の本学の教員養成は、貧弱極まりない無責任状態にありました。それが、今や各種の公立学校の教員採用試験に合格して教育界で活躍する卒業生が、年々、増加し、また国立大学の教職大学院に進学して教員になる卒業生、あるいは青年海外協力隊の試験に合格してアフリカや中南米などの後進国で学校教員として国際貢献する卒業生、等々、様々な形で教育という子どもたちの夢を叶える教育支援活動に励んでおります。今は昔、実に隔世の感があります。

そのような本学の教職教育の充実・発展を象徴する具体的な作品が、本誌『教職研究』にあります。先生方には、講習はもちろん、日々の授業や学生との触れ合いの中で、本学の教員養成教育に積極的に参加していただき、一人でも多くの人間性と学力に富む教員を輩出できますよう、お願い申し上げます。

## 追記一退職につき御礼

私こと、本年度限りをもって本学を退職することとなりました。僅か 7 年間という短期間の在職ではありましたが、大学再建の改革、特に教職教育の刷新に微力を注いで参りました。今、本学を辞するに際して、かつて 10 名前後の教職課程の履修者が、二学部体制に制度改革された故にか、今や 1 学年 100 名を超える教職課程の履修者がおります。そして驚くべきは、かつては夢のまた夢であった学校教員になることが、現実的に可能となったことでございます。毎年 10 名前後の卒業生が教職に就き、各地で優しさ溢れる人間教育を実践しております。これも、一重に教員の皆様、そして教務課を中心とする職員の皆様方の、教職教育に対するご理解とご支援の賜物であり、衷心より感謝申し上げます。

いまだ大学の生き残りをかけた改革の道半ばにおいて、本学を去ることは誠に忍びなく、一抹の淋しさを感じます。が、残された余命を、研究的人生の総仕上げの著作活動に傾注しながら、本学の、そして本学の教職教育の、益々の発展をお祈り申し上げます。在職中に先生方や職員の皆様方から頂戴した温かいご支援に厚く御礼を申し述べます。ありがとうございました。